

## 「問いを持つ」ということ

小川 英昭

先日、法事にお参りしたときのことで、お勤めの前に法事で用いる衣に着替えていると、小学生ぐらいの男の子から質問を受けました。

「どうして着替えるの？」

そのようなことを聞かれたことは初めてだったので少し驚きました。法要の重さということと言っても分かりづらいだろうと思い、大事な場所だから普段着から学校の制服に着替えるようなものだと説明しましたが、そんな説明で良かったのかどうかは自信がありません。

子どもは思いがけない質問をすることがあります。

「どうしてろうソクを点けるの？」 「どうして数珠を持ってお参りするの？」

改めて問われるとこちらもパッと答えを返せずに少し考えてしまったり、分かるように話さなければと思うと言葉を選ぶのが難しく困ってしまうこともあります。子どもは疑問に思ったことを素直に投げかけてくれます。

仏事に限ったことではありませんが、大人の世界では、「昔からそうだから」「周りの人がみんなそうだから」と、あまり中身や意味を問うこともなく行なっていることがたくさんあるのではないのでしょうか。

また、自分の人生について、いのちについてなど、本来は問われなければならないことについても、そういった重く難しい問いからは無意識に逃げてしまうということもあるような気がします。時間に追われる日常の中では考える余裕がないということもあるかもしれません。

私も学生時代から「問いを持つことが大事だ」という話をよく聞いてきましたが、子どもの素直な質問が、問いを持つことの大事さを教えてくれているように思います。